

玖珂隕石について

発見の経緯

1938年（昭和13年）1月10日、岩国市周東町大字川上字小畑（当時玖珂郡川越村字風子）で、共同作業中に地中から発見された。

繁永家の門前の小道を、道幅1mから2mに拡張・平坦化していた時、ツルハシが硬い塊に打ち当たった。表面が錆びついていて茶褐色をした6kgもある重い塊だった。

近くで石垣作りの別の仕事をしていた鉦山師が玄能で叩いて、2個の小破片を削ぎ落とし、断面が白銀色に輝いて、白金ではないかと騒ぎになり、所有を巡って諍いがあったが、

発見地の所有者である、中津井武一氏が保有することとなった、

最初は、マンガン鉦と思われたが、破断片を見た鉦山師は、ニッケルがあるらしいと推測した。

隕石同定までの経緯

中津井武一氏はその後、山口大学の前身校や広島大学の前身校・国立科学博物館等、順次掘り出し物を持参して見てもらった。

何れも、隕鉄であろうとの見解であったが、国立科学博物館では当時、専門家が居なくて無料での寄贈を求められたが持ち帰った。

12年後の1950年春（昭和25年）山口大学の高橋英太郎教授から、国立科学博物館の朝比奈貞一博士宛に7.3gの小片が送付され、調べた結果、オクタヘドライト隕鉄と判明、定性分析では、著しい量のニッケルが検出された。

命名の経緯

隕石の命名は、発見地の名前が付けられることが多いが、山口大学の高橋教授から送付された小片の付属のラベルには、「隕鉄・山口県玖珂郡落下（町村不明）」とあり、それで「玖珂隕石」と命名された。

もし、発見場所が特定されていれば、川越隕石と命名されたかも？

隕石の本体の移管

隕石の本体は、県立博物館に出品展示中であったが後日、東京に送り出すことになった。

寄付については、風子集落のための渡川橋の、修理代の一部にしたいとの商談となった。

1963年（昭和38年）5月20日に山口県立博物館が上京し、他の借用の返還と共に隕石を持参し、30万円で譲渡の商談が成立し、翌1964年（昭和39年）1月、中津井忠夫妻が上京、手続きが完了。国立科学博物館への移管が決定した。※ 山口博物館には、隕石本体のレプリカがある

移管の後日談

隕石の売却費30万円（現在の金額で300万円以上）は、当時洪水の度に流されて難儀していた土橋から、鉄筋コンクリート橋へと付け替えられた。

発見から66年後・橋の完成から40年後、現地に句碑が設けられた。

「隕鉄の架けたる橋 天の川 渡りて行くは 月の世界へ」

※奇しくも4年後には、アポロ宇宙船が月面着陸して、人類最初の第一歩の足跡を残した